

年間第4主日

高円寺教会 2011. 1. 30

マタイ 5 : 1~12a

今読まれた福音は、昔は、真福八端と言われていた、八つの幸いの話です。イエスが宣教活動を始めた頃の頃に説かれた大事な「山上の説教」の冒頭に当たります。今日は、少し長くなるかもしれませんが、八つの幸いについて1つずつ考えてみたいと思います。

イエスは、「この群衆を見て山に登られた」とあります。この群衆とは先週読まれた「あらゆる病気を癒された」(4:23節) イエスの癒しの業のうわさを聞きつけた人たちでした。病気や苦しみに悩む人々はイエスを頼って押し寄せていました。この説教を聞いているのは、金もつてもなくて、イエス以外に頼れる先がない人々でした。そのような人たちに向けたイエスの第一声は「心の貧しい人は幸いである。」でした。お金も親戚縁者のつてもなくて神様にすがることのない人々にイエスは、幸いだと言われていました。

私たちは、普通、貧しいより豊かになりたい、悲しむより喜んでいたい、と願います。けれども、イエスは「心の貧しい人」が幸いであると言われてます。この言葉は、現代の私たちにどのような意味があるのかと考えていました。すると、先週、4年近くかかわっているあるご婦人から電話がありました。その方は、40代までは自分で働いて生活していましたが、難病の症状が重くなり10数年前から働けなくなり生活保護を受けるようになりました。電話の相談というのは、働いていた頃に掛けていた保険の話（本来は生活保護を受ける際に申告しなければいけなかったのですが、体が動かなくなって外食するとか万一の備えのためにもっていたもの）を、その保険の話をついとうっかり役所の人に話してしまったというのです。役所の方は「その保険は国の財産です。明日その件で直接話しましょう。」と電話で言われたそうです。彼女は、また余計なことを自分が言って話をややこしくしてしまわないように、私に指導して欲しい、というのです。私は、もし生活保護を止められてしまったら、生きていけなくなるので、もう保険のことはあきらめて、国に差し出した方がいいと、時間を掛けて説明しました。ご婦人は、「わかりました」と答え、翌朝、また、役所の方が帰ってすぐに報告の電話をしてくれました。「おかげさまで、話はスムーズに進みました。保険はやはりすぐ解約して役所にわたすことになりました。生活保護も止められずに済みそうです。ただ、本当に働けないか、かかりつけの病院に問い合わせるとか、毎月どのように仕事を探しているか報告書を出すように言われました。また、誰かから支援を受けてないはこれから確認されることになりました。自分には、頼れる家族も親族もないのに、どうしてそんなこといちいち聞かれるのかと腹も立ちます。何かの時にとまって隠していた保険も取り上げられ、身ぐるみはがされる思いで

す。でも、自分で働けなくなって、何かの時にと思っていた蓄えもなくなって、私が頼れるのはイエス様しかいないことが分かりました。神様から受けることしかできないわたしに、あなたは幸いだ、とイエス様に言われているように感じるようになりました。」ご婦人の言葉は、群衆を前に「貧しい人は幸い」と言われたイエスの言葉が、今も私たちを励ましていることを実感させてくれました。貧しいからこそ、イエスに頼む、この姿勢を信仰の模範としましょう。

さて、イエスは、「心の貧しい人」の他に、七つの幸いについて語っています。駆け足ですが、一つずつ簡単に考えてみましょう。

2番目の幸いは「悲しむ人々」です。自分の至らなさや罪を悲しんで、神様の前で告白できる人々を幸いだと言います。私たちには、生きている上で、さまざまな痛みを持っています。中には、長い間ずっと引きずっている痛みがあります。確かに、心が痛むことは辛いことですが、最悪なのは何も心が痛まなくなることです。心が痛んでいるということは、神様に向かって、申し訳なかった、自分が至らなかったことを認めている証拠です。だから、心が痛んで悲しんでいることは救いの始まりとも言えます。自分の悲しみや至らなさを神様に告白して、重荷を解いてもらいましょう。

3つ目の幸いは「柔和」になることです。神様の前で自分の弱さを告白できれば柔和な気持ちになれます。自分を縛っていたものから解放されたので、生活も落ち着いて、心にもゆとりが生まれます。

心にゆとりが生まれると、神様のために、人のために何かしたくなります。4つ目の幸いは「義に飢え渴く」とありますが、「義」とは「神様の思い」「神様の計画」と考えていいでしょう。人を愛したり、人と仲良くしたり、世の中に役に立つことをしたい。そのような善意の心を「義に飢え渴く」と言い換えてもいいでしょう。

5つ目の幸い「憐れみ深くなること」は、4つ目の幸い「義に飢え渴く」と深く関係しています。苦しんでいる人を見たら、憐れみをもって関わりたくなる。心をこめて、その人のために尽くしたくなる。そのような心を幸いだと言われています。

6つ目の幸いは「心が清くなる」ことです。心の清さは、執着しない愛、濁らない愛と言い換えられます。人を本当に愛することは、思い通りにならない辛さを伴います。でも、その辛い経験を経て心が清められていきます。諸聖人たちは、愛するなかで心が清められました。

7つ目の幸いは「平和」です。情熱を注いでも、執着があれば平和が来ません。愛があって、それでいて心の清い人が平和を実現します。本当に平和を実現する人は、愛と心の清さの両方を持っています。

最後、8番目の幸いは、「義」を実現しようとして迫害にあうことです。典型的な

のは、殉教ですが、もう少し一般的に考えてみます。普通なら面倒くさがってしないことをあえてしているのに、周りからとやかく言われる。そのような体験に、イエスは幸いだと励まされています。

私たちは、この地上でさまざまな体験をしますが、それが天の国いるイエスからどう見られているかなかなか気付きません。天の国からイエスはいつも「あなたは幸いだ」と励ましています。このイエスの励ましを心に留めていきましょう。また、今日は、ミサの後、信徒総会があります。イエスの8つの幸いだという言葉が実現する教会になるように願いましょう。聖霊が、将来の高円寺教会を導いてくださるよう願いましょう。

イエズス会司祭 柴田 潔